The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞行到水窮処 ： グレゴリー・ケズナジャット『鴨川ランナー』（講談社、2021年）を読む
Author(s)	沈, 恬恬
Citation	日本学報. 2023, 42, p. 88-95
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91310
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

［書評］

行到水窮処

――グレゴリー・ケズナジャット『鴨川ランナー』（講談社、2021年）を読む――

沈　恬恬

0. はじめに

『鴨川ランナー』は、アメリカ合衆国出身のグレゴリー・ケズナジャットによるデビュー作「鴨川ランナー」と書き下ろし作品「異言（タングズ）」を収録した作品集である。

表題作の「鴨川ランナー」は、2021年第2回京都文学賞を満場一致で受賞した。この受賞作では、アメリカ人青年の在日生活の不安と葛藤が、「きみ」という二人称に語りかける手法で内省的に綴られている。主人公の「きみ」は、アメリカの高校で日本語と出会い、研修旅行で2週間だけ京都を訪れる。四条大橋から鴨川を眺め「まるで御伽噺の光景だ」[1]と息を呑んだ「きみ」は、帰国後「とにかくもう一度行くしかないような気が」[2]して日本語の学習に励む。アメリカの大学卒業後、英語指導助手として念願の京都暮らしを始めるものの、「きみ」は自身に向けられる「外国人」「ガイジン」への眼差しに戸惑い、時に怒り、そして諦めを覚えていく。そんな中で、「きみ」は谷崎潤一郎の小説に傾倒していき、不思議な縁を得て思いもよらない進路を歩むことになる。

「異言」の主人公である「僕」も、来日して働くアメリカ人だ。「僕」は、福井にある勤め先の英会話学校が倒産して失職し、教員住宅からの退去を余儀なくされる。元生徒の百合子を頼り、英語翻訳のバイトをしながら、なし崩し的に同棲を始め、元同僚の紹介で結婚式の牧師役のバイトを引き受けることになる。頑なに英語で話し続ける百合子、片言の日本語を要求する職場――「僕」は自身に課せられる「外国人」としての役割を否応なしに自覚することになる。

二つの作品に共通するテーマ・素材は、端的に言えば、「異言語、異文化との向き合い方」である。作者は、1984年、アメリカ合衆国で生まれ、2007年大学を卒業したのち、同志社大学に留学。2017年、同志社大学大学院文学研究科国文学専攻後期課程を修了し、現在は法政大学グローバル教養学部准教授である。「鴨川ランナー」のストーリーには作者の実人生が反映された部分も多いと言われている。

1.「きみ」が辿った道

ここで、私（筆者）の話を挟みたい。2022年3月、異なる国籍を持つメンバーたちによる日本（語）文学のオンライン読書会で、私は「きみ」の物語を知った[3]。あのとき、私は読書会のメンバーたちと「きみ」の物語についていろいろと語り合った。先に紹介したように、この物語は、英語を母語とする「きみ」が、ガイジンとして日本で暮らすことで経験した数多くの違和感から生まれたものだ。

そして、読書会の後も、私は、ずっと「きみ」のことをどう受け止めればいいのかと考えていた。なぜなら、「きみ」の辿った道は私のそれと似た点が多く、「きみ」に強い親近感を覚えていたからだ。日本語の初学者だったアメリカ人の「きみ」が京都を最初の旅行で訪れたように、中国人の私も小学生のときに日本語に接し、12歳で初めて関西を観光した。その約1か月間の滞在は、私にとって「幻」のような、それこそ「きみ」が言う「御伽噺」のような日々だった。「きみ」が6年間の日本語学習を経て再来日したように、私も初来日の7年後、ガイジンとして日本で暮らすようになった。日常の中で、母語と外国語（日本語）の間に名状しがたい陰影を抱えながら、理想と現実との距離を何とか埋めようとする。しかし影は深く濃くなっていくばかりで、理想と現実の乖離も解決する見通しが立たない。もがけばもがくほど感じる居心地悪さと怒り、どうしようもなさと諦め。「きみ」の物語は、「私」にとってあまりにもリアルで、身にしみる。

さて、もうすこし「きみ」の歩みを振り返ってみよう。「きみ」は、高校時代の授業での日本語との出会いがきっかけで、日本へ憧れを抱くようになった。地元の大学を卒業した後、「きみ」は、文部科学省の英語指導助手プログラムに申請し、採用される。幸運にも、高校生のとき研修旅行で訪れたあの京都市―「まるで御伽噺の光景」のように思えた四条大橋からの鴨川の眺めがある―と隣接する南丹市八木町が配属先となった。

英語指導助手として公立中学校で勤務する中で「きみ」は、同僚の日本人教員らとの、ぎこちないコミュニケーションに戸惑いを覚える。英語交じりの日本語への対策は、今まで読んできた教科書のどこにも載っていない。予想外の事態だった。「ガイジン」[4]である「きみ」に向けられる「優しさと好奇心と、いささか同情のようなものに満ち」た視線もまた、予想外のものだった。どんなに日本語を学習しても、京都に定住していても、「きみ」は結局、外から来て一定期間の後去っていく「部外者」に過ぎないのだろうか。

高校生のとき、日本語のセンセイが黒板に書いた「きみ」の名前―当時「自分の一部」とは到底思えなかった「カタカナの名前」――だが、日本語の学習を進めれば、いつかその「カタカナの名前」に表された人物になり切れると信じていた時期もあった。しかし、「外国人」に「外国人らしさ」を求める「日本らしさ」という壁は、「きみ」の努力では乗り越えられるものではない。インターナショナルパーティーで日本人と交流し、日本人女性と関係を持って

も、「きみ」は「常に一個人ではなく、英語なり海外なり漠然とした概念の代表とされてしまう」[5]。疎外感と徒労感に苛まれる「きみ」は英語指導助手の契約を更新することなく、「健全な」選択として「自分の居場所」へ帰ろうと決断する。

だが、結局「きみ」は日本を去らない。英会話学校に転職し、京都市内へ引っ越す。やがて、「きみ」は、もっと日本語を自分の中へと取り入れるために、日本語によって書かれた小説を乱読するようになる。日常生活では、外観も含まれた異質的な「きみ」は、常に日本人の振る舞いや言葉によって不自然に目立たされてしまうが、「きみ」のいない文字の世界では、「きみ」は自由に日本語を楽しめる。つまり、「きみ」にとって読書は、いわば「文字」のなかに「身体」を隠す行為だ。これは、疎外感からくるあの「カタカナとしての自分の一部」を忘れるための衝動ではないだろうか。

ところが、文字で織りなされた物語の世界からもまた「異言」[6]が聞こえてくる。本来の「異言」は、聖霊の力を与えられた弟子たちが様々な外国語で福音を告げるという奇跡であろう。が、現実世界における異言語・異文化コミュニケーションのそれは、あたかもキリストが未信仰者を説得するためにわざと仕立てた外国（語）であるかのように、ときには外国人に対する描写時のステレオタイプであったり、ときには空想上の「外国文化」であったりするものである。恐らく、そこで「きみ」も薄々と感じたのだろう。物語のなかで説かれた「外部」ないし「他者」というものの硬さは、主張しようとする「自分」と、その自分が抱え込もうとする「内部」とともに膨張するということだ。「内部」に入ろうとする者にこそ「外部」が出来上がるように、隠そうとしている「身体」という枠のそのものである実身体と実世界との接触は、どんなに「物質性を持って表れ」[7]るような「身体の連鎖」[8]をなしえても、この枠があるが故に、何となく覚えた疎外感から、もうひとつの「御伽噺の世界」が浮かんでくる。もちろん、このような世界は、決して「理想郷」[9]にもなりえないのだ。ただ、隠蔽と暴露のジレンマをどう乗り越えるかは、自分の居場所の形成可能性にもかかわっている。

居場所を確保するための「信仰」とまでは言わないが、少なくとも「きみ」は、「内部と外部」・「自己と他者」といった対立を避けた第三の道の再建作業を選んできたようだ。「きみ」は谷崎潤一郎の作品に惹かれ、谷崎が「京都に入ってきて一時的に暮らし、やがてはここで骨を埋めることにした」のを知ってある種の親近感を覚える。しかも、谷崎は「きみ」の近所に住んでいたらしい。「きみ」はある真夏日に、その谷崎の故居で富田教授と出会う。教授は、京都市内の大学で谷崎研究をしていた。

物語の中で、「きみ」の時間は一気に進んでいく。どうやら「きみ」は、旧谷崎邸での偶然の出会いをきっかけとして富田教授のゼミに入り、大学院で６年間谷崎研究に打ち込んだようだ。そして「自然な進路」として、大学教員になる道を選択し、東京へ行った。東京の大学は「グローバル」化推進のため、「きみ」のような「外国籍人材」を常に必要としていた。「きみ」の教員生活の一エピソードが語られる。女学生から「海外留学の価値」を問われ、

「きみ」は回答に窮する[10]。彼女は留学によって何を得、何を失うのか。その「価値」は定量的に測ることができるものなのか。予算を立て、決算を行える類のものなのか。彼女から発せられた問いは、そのまま「きみ」自身への問いになる。「きみ」が初めて自分の言葉と文化の外に出て、すでに15年が経っていた。様々な思いが心中を去来する中、ふと頭に浮かんだ言葉は「京都に帰りたい」[11]だった。京都に「帰る」？その日本語は正確だろうか。しかし、今の「きみ」にはその言葉しか見つけられない。

学会出席のため、「きみ」は京都に「帰って」くる。物語のラストシーンは「きみ」のスタートの地だった鴨川の川縁だ。初来日時、そこは「御伽噺の光景」だった。指導助手時代、英会話教師時代、大学院生時代に、朝のルーティンとして走り続けてきた場所だった。「きみ」はもう一度鴨川沿いを走り出す。何が変わり、何が変わらなかっただろう。「だがきみは確かにこの街にいた」[12]。

「きみ」は走る。「目の前にある百メートルだけに集中する」[13]。「きみ」が見つけたのは、「越境」という究極的な意味に通じる、何かではないか。目に見える言葉や国境といった境界線をいかに「越える」かどうかではなく、目の前にある百メートルだけに集中して、自分の足で「走り続ける」こと、それが越境の本質ではないか。

2. 独り走り始めた作品

このような「「きみ」の物語」が、京都文学賞の「海外部門」と「一般部門」のダブル受賞を果たしたことは、誠に喜ばしいことである。ただ、作品の中の「きみ」の「孤独」を汲み取っているはずの「優しい世の中」[14]の一部の眼差しは、作品の書き手の日本（語）文学の非ネイティブ性の側面をも強調しているように思う[15]。

文学賞を受賞できたことは、作者の「文字」が日本語のなかへ、そして、中心へ、また、その言語体系をある程度制御できるようになったとも言えよう。にもかかわらず、長いカタカナの名前を持つ作者によって書かれたこの作品の居場所は、いまだに「地理的な越境者」の持ったトランクに閉じこめられたまま、なお「通関手続き中」であるように思われる。というのも、作者の営みは、文学テキストに憑依しつつ展開されてきた文化批判理論では好まれ、エキゾチズムや、オリエンタリズムや、ネイティブの権威や、排外主義などといったキーワードのなかで見つめられてきた「ガイジン像」を、「きみ」への語りによって見つめ直し、掬い上げようとすることだからである。

しかし、このような営みは、国際化に遅れた日本文化への反省とともに、依然として「他者」を見つめ続けている「眼差しの問題」[16]にカテゴライズされやすい。また、物語のなかに描かれた種々の理不尽な「重荷」にも似ているが、「日本語であるかどうか」という一種の内

面化された物差しは、「日本語」という言葉自体を規定する時点で、自ずと動作する「監視のシステム」[17]のように、「日本（語）文学」の作品評論の現場の決まり文句となって、復唱されやすいものである。

一方、作者が既に作品のなかでもはっきりと提示したように、長いカタカナの名前を持つガイジンがガイコクで暮らしていく中で、このような眼差しの類の話は、結局のところ、どうでもいいし、どうでもよくなる[18]。どうでもいいもので、どうでもよくなるものであるが故に、ただただ一心不乱に自らの人生の道を走るひとりのランナーにとっては、必要のないものである。だから、眼差しを断捨離して身軽になれたことは、「この作品の素晴らしい美点」[19]であり、ひとつの到達点でもある。

他方、断捨離のプロセスとともに、削ぎ落とされ、こぼれ落ちた「非・言語的」[20]で他者的眼差しの交差するところは、「言葉」ないし「文学」を育てる土壌となる。見る眼差しと見られる眼差しを見つめ返す眼差しとが交錯する中において、異言語と異文化としての言語的世界が生まれる。このような言語的世界は、テキストというもうひとつの身体として現れ、新たな旅路につき、何かを語りだそうとしている。ただ、このテキストの身体から汲み取るべきものは、「孤独」以外、何であろう。

3. 作品に宿る信仰、あるいは、続く道

「「きみ」の物語」のあるべき居場所を探すのではなく、「物語が目指す未来」と同じ方向を見つめる、もっと柔らかい眼差しがあるとしたら、それはどんなものだろう。なぜか、私はヴェネツィアの宿で魔法のような光景を見たときの須賀敦子の眼差しを思い出さずにいられない。確かに、あの夜、谷崎潤一郎の作品という母語（日本語）をイタリア語という外国語に翻訳する経歴を持つ須賀は、このように淡々と自分の道のりを振り返った。

「ふたつの国、ふたつの言葉の谷間にはさまってもがいていたあのころは、どこを向いても厚い壁ばかりのようで、ただ、からだをちぢこませて、時のすぎるのを待つことしかできないでいた。とうとうここまで歩いてきた。ふと、そんな言葉が自分のなかにうまれ、私は、あのアヴィニョンの噴水のほとりから、ヴェネツィアの広場までのはてしなく長い道のりを、ほこりにまみれて歩きつづけたジプシーのような自分のすがたが見えたように思った。」[21]

須賀のここの語りは、異言語や異文化間に横たわる分断の傷口から滲み出た嘆きではない。これは、時間の川の向こう側とこちら側をつなぐ道が、止まることなく歩いてきたあの人の姿――ほこりまみれの記憶――によって繋がれていることを発見できた安堵の喜びで

ある。待ちに待った人の姿が現れた。この人の姿は、時のすぎるのを待ちつつ、未来を目指していた。未来を目指して歩いてきた「ジプシー」は、間違いなく、ここまで走ってこられた「きみ」なのだ。無数の夜が明けて、夜の魔法を解く朝の光において、しっかりと確認できるほど、「きみたち」は輪郭をもっている。ようやく邂逅した「きみたち」は、橋の真ん中辺りに立ち、北を見る。この眺めがまるで御伽噺の世界のように見えた時期は確かあった。だが、「あの頃「きみ」の想像を掻き立てた空白は今や無数の記憶に充たされている」[22]と思っているのだ。

奇跡はいつも立ち止まった瞬間にやってくる。須賀がヴェネツィアの宿で見えた道と「きみ」が京都の橋のうえで見えた道はある瞬間において交差している。須賀にとっても、「きみ」にとっても、このように交差して形成された瞬間とは、いわゆる国境上の「自己と他者」としての線引きではなく、時間上の現在とあの頃を接続する複数の「道」のことではないだろうか。そして、このような複数の「道」のなかで、「私」の眼差しを媒介しつつ、「私」と「あの自分＝「きみ」」とは面と向かって、他者の眼差しについて語り合えるようになり、「きみたち」の言葉・記憶・作品が生まれたのである。

問題は、このように生まれた言葉も記憶も作品も裏切り者である、ということだ。裏切りの意味は、母語や出来事の虚実に従った「本心か演技か」[23]の二者択一の設問によって問われるのではなく、それぞれの異なる事実において信じられている「真実」がぶつかり合ったときに、走り続けられる「道」という信仰を如何に再建するかということにかかっている。

例えば、本書のもうひとつの短編「異言」のなかで、「きみ」は、「僕」として、結婚式の神父を演じるアルバイトをしている。「僕」としての「きみ」に求められたのは、片言の日本語を話す程度のことだった。そこで、「僕」は、幼馴染のレズリーが洗礼の時に「神がかり」になって、意味不明の言葉（「異言」）を発したことを思い出した。また、レズリーは「本当に聖なる力を感じていたのか。そんな力を信じたくて、その渇望が自ずと彼女の口から溢れ出たのか。それとも彼女はただその場で要求された演出を果たしたのか」[24]という「僕」のあの頃の疑問が、時を経て「片言の日本語で結婚式の祝祷を述べる」という状況の中で、再び「僕」自身に投げかけられた。

そうすると、信仰は、マントを被った取りあえずの神父さん――本物だろうが、偽物だろうがとは関係なく――が、結婚式で発する異言――これは英語であろうが、日本語であろうがとも関係なく――のように、そもそも、翻訳作業のなかで求められる「別の言葉を再建する作業」[25]の中に潜む。このため、信仰は、秩序の「正当性」[26]への裏切りをひそかに準備しているのである。さらに、このような「持続的」信仰も、きっと「ある」か「持つ」かといった動詞の対象ではないだろう。なぜなら、もし信仰が対象であるなら、様々な思いが裏切られても走り続けるランナー（須賀の場合は「ジプシーのような自分」）としての「きみ」も、言葉を摑もうとしても摑め切れなかった「僕」という翻訳者になった「きみ」の姿も、存在しなかっ

たはずだから。

水の窮まるところに至って、ようやく雲の湧き起こる瞬間を座って見られる、という境地に至らなければ、立ち現れたりしないものが、信じる者たちが目指した道であろう[27]。この意味において、本書のなかで描かれたより本質的で「普遍的なもの」[28]は、翻訳論にも越境文学論にも回収されない別の未来があることを願ってやまない。と同時に、「きみ」と同じく東京に移住し、ICOCAからSuica[29]へと切り替えようとしている私も、いつか学会への参加を機会に京都で宿をとり、鴨川の「水窮処」である志明院を訪れてみたいと思う。

注

1 『鴨川ランナー』16頁（以下、作品の表現の一部の転写がある場合を除き、ページ数のみ記載）。

2 18頁。

3 この読書会は2021年の夏、沈正明さんの呼びかけで発足した。ここでは、メンバーである、（五十音順）金志映さん・沈正明さん・崔高恩さん・西川和樹さん・古川岳志さんに深く感謝を申し上げる。

4 40頁。

5 60頁。

6 本書に収録されたもう一つの短編のタイトルである。

7 「懐かしい写真の原板を見るように、以前はただ取るに足りないネガティブペースとして認識していたものが物質性をもって現れる。」41頁。

8 「ただ繰り返し接触し、そしてまた離れていく身体の連鎖で、メリハリのない日常が漠然と続く。」76頁。

9 「理想郷でなくても、こうして朝の日差しを受けて光っている見慣れた景色は鮮やかで、それなりの美しさはある。」66頁。

10 89−91頁の会話を参照されたい。

11 92頁。

12 97頁。

13 97頁。

14 たとえば、真実（ときには、事実）を知らずに、いわゆる「社会的通念」に基づき、「被害者」や「マイノリティ」などのカテゴリーを作り出し、これに同情する風潮をどう反省するのかを考える必要もあるかもしれない。参考として、凪良ゆう『流浪の月』創元社、2019年。

15 尾崎希海「米国出身青年の葛藤、日本語で紡ぐ　グレゴリー・ケズナジャットさん「鴨川ランナー」」『朝日新聞』2022年3月23日。

16 鴻巣友季子「今週の本棚」『毎日新聞』2021年11月20日。

17 「すかさず、常に自分の日本語を監視している脳の一部が警鐘を鳴らしだす。」92頁。

18 ポールについての描写（62頁）を参照されたい。「だが現実はずっと複雑で、ちぐはぐなものだった。」91頁。または、「異言」の168−169頁を参照されたい。

[19] 長瀬海 2021年12月3日「外国人が経験する「ガイジン扱い」から自他の線引きを見つめ直す」『週刊金曜日（1356号）』54頁。

[20] 金原ひとみ「書評：『鴨川ランナー』グレゴリー・ケズナジャット〈著〉」『朝日新聞』2021年12月18日。

[21] 須賀敦子『ヴェネツィアの宿（須賀敦子コレクション）』白水社、2001年、12頁。

[22] 98頁。

[23] 「本心か演技か、大した違いではないかもしれない。」169頁。

[24] 159頁。

[25] 翻訳についての作者の考えは、128－129頁の叙述を参照されたい。

[26] 鴻巣友季子「文芸時評：言語の正当性　翻訳の先の世界を見越して」『朝日新聞』2022年2月23日。

[27] 「中歳頗好道、晩家南山陲。興来毎独往、勝事空自知。行到水窮処、坐看雲起時。偶然値林叟、談笑無還期。」王維（唐）『終南別業（入山寄城中故人）』

[28] 「単に海外の視点でみた京都、ということではなく、普遍的なものを書いたつもり」尾崎希海「異文化間のゆらぎ、繊細に米出身ケズナジャットさん「鴨川ランナー」『朝日新聞』2022年3月16日。

[29] 「地下鉄の改札口でICカードをかざす。手に持っているのはもうICOCAではなく、Suicaだ。」87頁。